五感でまちを捉え直す

脇坂敦史＝構成
宮村政徳＝撮影

巨大資本の流入や不動産開発により都市空間の均一化が進むなか、まちの記憶を引き継ぎ、豊かな奥ゆきのある「場」をつくるにはどうすればよいだろうか。「五感で感じる身体性」をキーワードに住生活の調査研究に携わる島原万丈氏と、都市地理学の視点から盛り場のフィールドワークを行う加藤政洋氏に、数値では測れない「場」の魅力について語っていただいた。

対談

島原万丈 Shimahara Manjyo
［LIFULL HOME'S 総研所長］

×

加藤政洋 Kato Masahiro
［立命館大学教授］

オフィスビルが建ち並ぶ大阪・道修町（どしょうまち）にある「少彦名（すくなひこな）神社」。
18世紀後半から薬の神様を祀り、周囲には今も製薬会社が連なる。

都市の魅力と五感で感じるエロス

加藤　島原さんが中心となってまとめられた「Sensuous City［官能都市］――身体で経験する都市：センシュアス・シティ・ランキング」という調査研究は、「官能」という言葉をキーワードに魅力的な都市のあり方について考察した画期的な試みですね。思い出したのは、フランコ・ベラルディ（ビフォ）というイタリアの思想家が、現代都市とは本来、エロスの空間であると述べたことです。彼のラディカルな思想のなかでは、本来は五感で直接的に感じるべきものである都市が、今は快適な車で好きな音楽を聴きながら窓ガラスを隔てて見るだけの、いわば「ポルノグラフィ」になっているというのです。

島原　それをおっしゃっていただき嬉しいです。実は私たちもエロス（エロース）という言葉を使おうとしていたのです。効率優先でつくられる最新型の高層ビルやショッピングモールにもよいところはあるが、何かが足りないと感じる。それは、ロゴスに対するエロスのようなものであろうというのが出発点でした。幸いにも多方面で好評を博してはいますが、「官能」などという言葉はけしからん、と怒られることはよくありますよ（笑）。とはいえ、私は長くマーケティングの仕事をしていたもので、都市の専門家ではありません。加藤先生のご著書『花街――異空間の都市史』も読み、勉強させていただきました。

加藤　私が盛り場的なものにひかれていろいろな都市を巡り歩くなかで、とりわけ面白いなあと思うのは、都市が都市としてできあがってくる瞬間に、特定の機能みたいなものが集積することです。明治以降の日本ではとりわけ顕著な傾向ですが、それは決まって生鮮食料品などを売る市場的な要素、歓楽街のような「花街的」な要素、さらには劇場や映画館といった娯楽的な要素の3つです。こういう娯楽的な消費の局面というのは、都市のインフラや住宅がままならないような状況でも、人が集う核のような場として必ず生まれている。

島原　それを「インキュベーター」という言葉で表現されているのが印象的でした。娯楽的な消費というのは、都市計画やまちづくりの専門家にとってだけでなく、一般に都市がもつさまざまな機能の最後につくオマケみたいなものと考えられていると思います。しかし歴史的な流れを見ると、むしろそれが先行してまちをつくっていくのですね。

リノベーションがもつ新たな可能性

加藤　島原さんは、駅前の景観が画一的でどこも区別がつかないと指摘されています。私も自分なりになぜだろう？と考えてみました。たとえば大阪駅は大阪市の外側である旧曾根崎村につくられました。田んぼのど真ん中ですよね。そういう、いわば「場の履歴」の書き込みが少ないところだからこそ、あまり土地に縛られない魅力があって、戦後の知識人たちなどはかえって期待をもっていたのでしょう。

島原　地方都市でも、古い中心市街と離れたところに駅があるという例は多いですね。一方で東京では、東急が大正時代に沿線で主導したまちづくりが象徴的ですが、比較的ウォーカブルなまちが駅を中心に広がっている。しかし、どちらのタイプの駅前でも今は大規模な投資が入って高層オフィスや高層マンションをつくるという再開発が行われています。事業化し、予算をつけ、補助金をつけた時点でフォーマットが決まってしまうのです。

加藤　だとすれば逆に、大規模な再開発のない旧来の市街地にはまだこの先、歴史性を踏まえた可能性みたいなものがあるのではないでしょうか？

かつてその都市が生まれた核であったような場所へ今行くと、例によってシャッター街になっていたり、もの悲しくなるようなことも少なくありません。でも、最近はちょっとしたリノベーションが行われていたり、特に魅力のある飲食店などが集客力を高めているような光景に出会うこともあります。

島原　まさに、その通りだと思います。リノベーションでまちづくりをしようという動きのなかで目立つものはほとんど旧市街地です。とはいえ、わざわざ商店街へ行って買いたいというものがなく、Amazonの荷物で宅配がパンクしているような時代に、物販という機能で再生するのは無理。やはり飲食系、あとはインバウンドの流れを狙った宿泊が多いですね。

加藤　飲食や宿泊以外でも、何か面白い動きはありますか？

島原　北九州市の小倉（こくら）などで、働く場所をリノベーションでつくろうという試みが目をひきます。いわゆるコワーキングスペースであったり、あるいは地元の子育てママなどが起業できるようなショップ兼アトリエだったり。

加藤　それはやはり、職と住の近接性が前提となっているわけですよね。

島原　そうです。東京の不動産マーケットでもいちばん活況を呈しているのは、中央区のような都

心です。家計を支えるひとりの働き手が長い時間をかけて通勤するということを前提とした住宅地開発が続いてきましたが、今はそれを続けるのが苦しくなった。男性も女性も家で子育てをして、外でも働く。その場合、職と住は近い方がよいに決まっている。また、手に職がある人は、数年のブランクがあって元の会社に戻るということではなく、コワーキングスペースなどを使ってフリーランスで仕事をする人も多い。保育所も併設されていれば、なおいい。そんなニーズが大都市でも地方都市でも生まれているのだと思います。

加藤　小倉でそのような流れが起きているのには、背景があるのでしょうか？

島原　北九州市がリノベーションスクールというのを後押しして、新しい形のリノベーションが起こるような仕掛けをしているのが大きいと思います。空いているビルのオーナーから物件を「教材」として提供してもらい、全国から集まった研修生たちが実際にプランニングして提案するという形です。成功事例が出はじめてくると、「こういうのはいけるかもね」みたいな形で追随する動きが出てくる。

加藤　まずニーズありきではなく、むしろ後から需要がついてくるようなイメージなんですね。

島原　ですから、最初の読みがすごく大事です。このエリアをどういう方向に読み替えることができるか？　立地的、歴史的な特徴を把握して、それをこう変換できるのではないかとコンセプトを立てる。リノベーション事例がうまくいくときは、経絡に1本鍼を打つと効果が広がっていくような力を感じます。

加藤　大阪でも今、新今宮の駅前の土地を星野リゾートが買ったというニュースが話題になっています。新今宮といえば通天閣のある新世界にも近く、関西空港と直結する便利な場所ですが、南に隣接する西成区の日雇い労働者の街「あいりん地区」のイメージも強く、これまでは簡易宿泊所や料金の安いビジネスホテルなどが目立ちました。

島原　最初に聞いたときは私も、えっ！と思ったんですが、ひょっとすると、面白いことが起きるかもしれませんね。まったく異質のものが入ることで、今までなかった価値観や目線で街を見る人たちが増えていきますから。

加藤　おっしゃる通りですが、あまりにもカラーが違うという意味で、半分は心配な面もあります。「あいりん地区」周辺でも最近はまちづくりを頑張っているので、そこに大規模な資本がどんと入ってきて、下から積み上げているプロセスが台無しになることも、ありえなくはないのかなあ、と思うのです。

島原　確かに日本の場合、常に再開発が先に動いてしまうのが問題ですね。たとえば、ニューヨークのチェルシーでも精肉工場、倉庫、廃線跡といったものを活用した再開発が話題になっていますが、もとは倉庫をギャラリーとして使ってみる、といった小さなまちの変化が出発点にありました。先に大規模なプランを置いてしまうと、どちらに転ぶかわからないというような危うさも出てきてしまうのだと思います。

日本ならではのサードプレイスのあり方

加藤　自宅でもなく職場でもない、居心地のよい「サードプレイス」という概念について、どのようにお考えですか？　私などは、つい飲み屋さんをイメージしてしまいますが……。

島原　今の日本でそのまま使える概念なのだろうか、と少し思いますね。そもそも東京などでは、やはりファーストプレイス（自宅）とセカンドプレイス（職場）が遠すぎて、「サードプレイス」の立地が偏ってしまいます。

加藤　そこのところを無理に分離したのが、日本の近代的な都市計画の特徴ですね。電鉄資本も重要な役割を果たしたのだと思いますが、遠距離の通勤を前提としたライフスタイルが定着したことによって、働くのは男性、家にいるのは女性というような分割もできてしまった。もしかしたら、先ほどの小倉の例のように職と住の近接がこれから進むと、「サードプレイス」のあり方も変わってくるのかもしれませんね。

島原　とりわけ団塊の世代が大量にリタイアするようになりますが、高齢者の活用を考えたら高齢者が少しでも働きやすい環境をつくる必要があると思うんです。でも、長時間の電車通勤は大変。だから、たとえば大阪でいえば泉北ニュータウンのようなところに働く場所をつくれないか。単一用途に限った厳格な土地利用のゾーニング規制によって、コンビニすらつくるのが難しい場所ですが、高齢者の労働力を上げるという意味でも、郊外住宅地の用途機能をもう少し緩やかにして、さまざまな機能を「混ぜ込んでいく」必要がある。同じように、これまで「サードプレイス」を都心の職場近くにもっていた人たちが退職してしまうと定期券もなくなるので、遊ぶところもなくなる。退職して家庭以外に行き場を失ってしまった人たちが、「地元でつるむ場所」も特に郊外で必要になってくるのではないでしょうか。

加藤　高齢化といえば、私が住む京都の中心部でも「フード・デザート（食の砂漠）」の問題が出てきているんです。手押し車のおばあちゃんたちがどこで買い物をするのかという、切実な問題です。京都には大きなスーパーが今、どんどんできていますが、やはり使いにくい。京都は長屋で自宅にお風呂がないという人も多いので、銭湯がひとつつぶれるたびに遠くまで行かなければならない、という問題もあります。

島原　そういえば、銭湯は高齢者にとっての素晴らしい「サードプレイス」ですよね。大都市には多くて、最近は人気もあるのですけど、全体としては減ってしまっている。

歩くことと都市の魅力

加藤　都市の魅力、とりわけ商業地区の魅力というのは、基本は歩くところにあると私は考えています。

島原　私もそう思います。長年住んでいるまちですら、見知らぬ風景を見つける。あるいは、人と出会う、匂いをかぐ、音も聞こえる……。五感で都市を経験することが、いろんな出来事を生みますよね。

加藤　日本にも、かつて石川栄耀というユニークな都市計画家がいました。「夜の都市計画」として、歩ける範囲にさまざまなものが混在しているような商業空間をつくるべきだと考えた人です。大正後期から昭和の戦前期にかけて、余暇といえば主に仕事が終わった時間でした。「徒歩半径」のなかに、まさに「歩いて、楽しい街」をつくろうとしたんです。当時のことですから、そこには花街的な要素もありますが、ただ歩いて、見て、楽しいだけというようなものもある。

島原　それは、ぜひ勉強したいですね。今はそういった「盛り場」的なものが、都市計画的な場面でまったく議論されないのが問題だと思います。夜の話だから、昼間の会議室でスーツを着たような真面目な人たちにはできないのか……。

加藤　そういう意味でも、石川栄耀は先駆的です。「盛り場を知らずして、都市をつくるなんてことはできない」とはっきり言っているんですね。

島原　素晴らしい（笑）。都市のなかにある猥雑性を排除していくような圧力が強まったのは、やはり戦後でしょうか？

加藤　圧倒的に戦後でしょうね。かつての日本には、もっと豊かな道路空間の歴史というものがあったと私は考えていて、それが貧困化して今の自動車優先の道路になったと感じているのです。

登録有形文化財に指定される町家の前で。大阪を歩くと、まちの記憶を受け継ぐ建造物にあちこちで出会う。

島原　おっしゃる通りです。仙台の定禅寺通りなどは、世界的に見ても素晴らしい並木と歩道があるのに、オープンカフェの1軒もない。一部では見直しが始まっていますが、やはり「道路交通法」の抵抗というか、道路は食べたり遊んだりするところではないという考えが根強い。公共空間で商売をして儲けるのはけしからん、というような話も出てくるし……。同じことは水辺でも起きています。東京では、隅田川テラスという立派な遊歩道を整備しました。桜の時期は花見で賑わっていますが、お店はありません。だから、ふだんの夜はがらんとして、怖いくらい。

加藤　京都の鴨川沿いにある納涼床は東京の方でもご存じだと思います。でも、あれは比較的、新しい形なんです。本来の納涼床は、河原の中などで誰もが自由に入り、自由に抜けられるような、そういう空間でした。そこに屋台とか金魚すくいとか、氷屋さんとかが出てきて……これも、河川にまつわる法律の影響で、庶民の楽しみとしてはなくなってしまいました。

島原　それは楽しそうですね。確かに治水や災害対策という観点から、「じゃあ、もし地震や火事、洪水が起きたらどうするんだ？」と言われたら、言い返せないのですが……。しかし、「だから全部ダメ」というような、最も短絡的な解決法になってしまっているのが現状ではないかと思います。

加藤　福岡市が進めている、観光への屋台の積極的な活用というアイディアも面白いですよね。

狭い道やバリアが人を「その先」へと誘う

加藤　住む人にとっても安全で、外から来る人にも寛容なまちというのは、具体的にどのような形でつくればよいのでしょうか？　ジェイン・ジェイコブズという人の考えは、今となっては本当に新しい。要するに見ず知らずの人が夜のバーとかレストランに集まってくることによってむしろセキュリティが高まり、安心安全が担保されるという。けれども、日本のまちづくりは、まったく逆の方向へ向かってしまっているような気がします。「スーパー防犯灯」なんかの設置に始まり、どちらかというと異物を排除する力が強まっている。

島原　多種多様な人やものが共存し、外から来た人々に対しても開かれている。大阪のようなまちは特にそうだと思いますが、もともと日本の都市というのはジェイコブズ的な寛容性をもって開かれていた場所ではないですか？

加藤　そうだったと思います。

島原　だとすれば、まずは比較的、細い道路を大事にすることから始めて……。

加藤　そこは本当に重要ですよね。道を広げないことです。

島原　東京などは特に防災意識が高いので、道路は広げるべきという考え方が一貫しています。でも自動車との共存というか、車をどこまで入れるかという議論は、もう少し丁寧にした方がいい。広い道路があっても、ほとんどの車がただ通過するだけだとしたら、たとえば駅前に大きな道路はいらないのではないか？という発想も必要です。

加藤　道路の細さは、賑わいも演出できますね。阪神・淡路大震災前後の神戸の商店街を比較してみると、道が広すぎたところは、がらんとして見える。狭いところは生鮮食料品の店があるだけで、ちょっとした張り出し効果もあり、賑わいが感じられる。もちろん都市計画や消防法など、いろいろあるとは思うんですが……。

島原　迷宮のような市場とか、先が見通せないような狭い商店街。歩きたくなる場所というのは、必ずしも歩道が広くて段差がないところを意味しないんですよね。「官能都市」の調査で、「歩ける」という指標の1番になったのは東京の文京区でした。文京区といえば、坂や段が多い、いわば「歩きにくい」エリア。その方が、逆に歩きたくなるものなのかもしれませんね。

寛容性があり、自由に歩けることがまちの魅力になると語る両氏。

加藤　起伏というのは一方でバリアになるけれども、それが逆にまちや風景の魅力であったり、「その先」へ一歩、誘う装置にもなるんですね。そして、人が歩きたくなる場所、歩ける場所というのが、最も安全で安心できるところでもある。現代の人々がもっている都市のニーズと、歴史的なまちづくりのあり方がつながるという意味で、今回のお話はとても刺激的でした。ありがとうございます。せっかくの機会ですから少し外に出て、大阪のまちを五感で感じるために歩きましょう。

島原万丈
しまはら・まんじょう
LIFULL HOME'S総研所長。1965年生まれ。89年㈱リクルート入社。2013年3月リクルート退社、同年7月より現職。ユーザー目線での住宅市場の調査研究と提言活動に従事。著書に『本当に住んで幸せな街　全国「官能都市」ランキング』がある。

加藤政洋
かとう・まさひろ
立命館大学文学部教授。1972年生まれ。博士（文学）。専門は文化・歴史地理学。流通科学大学助教授を経て現職。著書に『花街　異空間の都市史』『大阪のスラムと盛り場　近代都市と場所の系譜学』『モダン京都』、編著に『都市空間の地理学』などがある。